

〔書評と紹介〕

榎森 進・小口雅史・澤登寛聡編

『北東アジアのなかのアイヌ世界』

アイヌ文化の成立と変容

— 交易と交流を中心として 下 』

浅倉 有子

一 はじめに

本書は、同じ編者による『エミシ・エゾ・アイヌ—アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として 上』の続編で、二〇〇七年に法政大学日本文化研究所から刊行された報告書『アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として』を母体としたものである。本書の題名を「北東アジアのなかのアイヌ社会」とした理由について、編者の榎森は、一九九〇年代以降の中国側の文献史料を利用した研究の進展をふまえ、「北東アジアのなかのアイヌ民族」という視点からの研究が不可欠なものとなったことをあげている。

以下に述べるように、本書は四部に編成された二編の論文によって構成されている。それぞれの論文のテーマと論点は多岐にわたるもので、それらを全面的に論ずることは、私の力量をはるかに超えている。したがって、本稿では、私の理解できる範囲で各論文を紹介し、あわせて本書全体について若干のコメントを述べることで大方のご寛恕を請いたい。

なお、『エミシ・エゾ・アイヌ—アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として 上』については、『国史研究』第一二六号で、吉田歆氏が丁寧な紹介と書評をされている。

二 本書の構成と概要

第一部「北東アジアのなかのアイヌ社会」は、中村和之・小田寛貴「蝦夷錦と北のシルクロード」、佐々木史郎「東アジアの歴史世界におけるアイヌの役割」、北原次郎太「樺太アイヌの木製品における刻印・人面の信仰的意義」の三つの論文によって構成されている。

中村・小田は、清朝の辺民支配や文化人類学の研究成果をふまえて、毛皮という朝貢品に対する回賜として蝦夷錦が与えられること、一九世紀後半のロシアのサハリン進出と、函館奉行所による山丹交易の廃止の決定が、サハリンの先住民の社会を決定的に変質させることを述べ、現存する蝦夷錦の¹⁴C年代測定という新しい研究成果と文献研究との整合性を指摘する。佐々木は、多角的に見たアイヌの歴史、東アジア世界におけるアイヌを論じるためにサハリンアイヌを取り上げ、日清両勢力のせめぎ合いのなかでサハリンアイヌの変化を時代を追って描き出す。サハリンアイヌは、清朝によりハラという父系の社会組織に編成されて毛皮の貢納にあたる一方で、ソウヤのオムシヤに参加するなど両属的な性格を持ち、サハリンにおける物流の主導権を担っていた。また、北原は、樺太アイヌの木幣や冬期住居の柱、木製守護神に刻まれた刻印の特徴やその分布について明らかにし、北海道アイヌや他民族との比較を行う。

第二部「北海道アイヌの文化と秩序」には、宇田川洋「考古学から見たチャシの年代観」、関根達人「タマサイ・ガラス玉に関する型式学的検討」、渡部賢「ツクナイ」と『起請文』、坂田美奈子「ウイマム」と『御目見』にみるふたつの認識論」、長澤政之「場所請負制下のアイヌ社会―場所における生産と労働」、市毛幹幸「日本近世の蝦夷地シコツ・イシカリ・サルの地域的特質」、佐々木利和「法政大学本『蝦夷島奇観』の一について」、山田志乃布「松浦武四郎の地誌・地図作製とアイヌ民族―『天塩日誌』を素材として」の八編の論考が含まれる。

宇田川は、チャシの壕に堆積した新期火山灰の分析からチャシの年代を考察し、時系列に示した上で、文献史料、出土遺物との整合性や課題を論じる。関根は、アイヌ墓などから出土したタマサイ、ガラス玉と伝世品のそれらの形状を型式学的に検討することで、一五世紀から一九世紀に至るタマサイとガラス玉の編年を行う。渡部の論文は、シャクシャイン戦争に際して、松前藩がアイヌに求めた「ツクナイ（償い）」と起請文について再考したものであり、坂田は、「交易」を意味するアイヌ語の「ウイマム」を、御目見儀礼と解する和人との認識のずれの政治性について、アイヌ散文説話を素材に論じる。長澤は、子モロ場所を事例に、アイヌの「自分稼」が「ノルマ化された自分稼」として変容していること、「飯料支給」によってアイヌが雇い漁場へ囲い込まれることを指摘する。市毛は、シコツ・イシカリ・サルというそれぞれの地域概念の成立と、そこに居住するアイヌの政治的・社会的な位置付け、アイヌの自己認識について論じる。佐々木は、法政大学所蔵の二種類の『蝦夷島奇観』について、流布本との比較を行いつつその特徴を論じる。山田

は、松浦武四郎の『手塩日誌』の記述から天塩川流域のアイヌの地域認識を抽出し、かれらが有していた空間的情報を考察する。

第三部「本州アイヌと幕藩制」は、関根達人「本州アイヌの考古学的痕跡」、高橋亜弓「近世前期における弘前藩のアイヌ支配と藩意識―『御目見』『差上』―『被下』事例の分析から」、浪川健治「幕府巡見使と本州アイヌ―享保二年巡見使にみる『狄』の『差異』化と応接体制」、瀧本壽史「青森県所在の蝦夷錦について」の四編から成る。

関根論文は、青森県内の中近世遺跡の出土物を対象に、本州アイヌと北海道アイヌに共通する物質文化を明らかにしたものである。あわせて浪岡城北館でアイヌ向けのガラス玉の加工が行われた可能性と、十三湊における蝦夷拵の一部と考えられる菊造柄縁金具の出土という重要な指摘を行っている。高橋論文は、弘前藩の領内アイヌに対する「御目見」と献上、下賜について、時期、場所、形式、品物などの諸側面から検討したもので、四代藩主信政の山鹿素行学への傾倒と藩の支配意識を要因として指摘する。浪川は、享保二年（一七一七）の巡見使の記録を中心に、弘前藩領の巡見の要所として、宇田村のアイヌの巡見が位置付けられていたことを指摘し、あわせて巡見使の松前渡海に際してアイヌが漕ぎ手として動員されたことの意味を論じる。瀧本は、青森県内の三三三の蝦夷錦の特徴や伝来の年代などを論じ、その受容のされ方を提示する。

第四部「蝦夷地の和人と幕藩制」は、新藤透「『新羅之記録』の形成過程に関する一考察」、川上真理「松前藩主の象徴的基盤と神話・芸能―松前神楽の儀礼構造にみる」、澤登寛聡「『蝦夷地之制札』設置方針に関する若干の考察」、木村涼「天保改革と松前における旅芝居興行―越

後の『中村清治』一座を素材として、塩屋朋子「秋田土崎湊と松前蝦夷地との商品流通の実態―近世後期の事例を素材として」、山田志乃布「蝦夷地・和人地・内地をめぐる流通システムとその再編―幕末期江差を中心として」の六編を含む。

新藤は、正保三年（一六四六）に成立した松前氏の史書『新羅之記録』について書誌学的な検討を行い、その成立の過程と典拠史料を明らかにすると共に、今後の利用・読解の課題を示した。川上は、松前神楽が催される場とその伝承の政治的・社会的な機能などを検討し、松前神楽が松前氏の英雄神話としての性格を有していると論じる。澤登は、「蝦夷地之制札」を素材に第一次幕領期における幕府の法支配の理念を、木村は越後の旅芝居の一座が興行を禁止された事情を天保改革との関連で論じる。塩屋は、一九世紀における秋田土崎湊と松前蝦夷地との商品流通の具体相を、山田は、幕末の江差を対象に、鯉集荷船をめぐる北前船商人や江差問屋、江差周辺の漁民の動向を分析することで、流通システムの再編について考察する。

三 本書の成果

第二節で各論文の概略を紹介したが、ここでは本書全体を通して得られた成果について簡略に述べたい。

第一に、東アジア、北東アジア世界のなかのアイヌという視点による研究の進展があげられる。佐々木史郎が指摘するように、この視角により、本州側から見たものとは全く異なるアイヌの歴史像が提示されるこ

とになる。編者の榎森が述べる本書の題名の所為でもある。

第二に、アイヌ文化の特徴であるガラス玉の編年分類が行われるなど、アイヌの物質文化の具体相が時系列で示されたことである。これは、アイヌ考古学の著しい進展の成果であるとともに、モノ資料と文献史料との融合によって、北方（佐々木史郎の視点では「南方」）の歴史像を豊かに提示する可能性を示したものである。

第三に蝦夷地内の個別の地域が分析の対象となり、和人側の史料を批判的に分析することで、場所請負やアイヌの生業のあり方、アイヌの自己認識など、地域間の相違が実証レベルで提示されるようになった点があげられる。

第四に基本史料の一つである『新羅之記録』の書誌学的な分析が行われるなど、松前氏による史書編纂や歴史認識が研究の対象とされた点である。あわせて山田の『手塩日誌』や坂田の散文説話を分析する視点など、史資料を読み解く新しい視点が示されていることを指摘したい。

第五に考古学と文献史学の両者による本州アイヌに関する議論の深化があげられる。弘前藩五代藩主信寿期の評価について、高橋と浪川は異なる見解を示したが、この点もふまえ、さらなる論点の提示と研究の蓄積が期待される。

第六に、本州、和人地、蝦夷地、サハリン、大陸の流通の具体相が実証研究をふまえ、明らかにされつつあることをかかげたい。

『新編八戸市史 近世資料編Ⅱ』

蔦谷 大輔

四 おわりに

以上、はなはだ雑駁であるが、本書の概略と成果について述べてきた。本書は、北東アジア史研究、北方史研究のこれまでの研究の成果を顕著に示すものであるが、今後さらに検討すべき数多くの論点を示すものでもある。本書の刊行により、一層研究が進捗することは、同じ分野に関心を持つ者として心強く、また刺激的でもある。私の力不足により、理解が至らなかった点が多々あったことにつき、改めてご海容をお願いして、拙い紹介を終えることにしたい。

(A5判、五五五頁、二〇〇八年十一月、岩田書院、

価格一三〇〇〇円十税)

(あさくら・ゆうこ 上越教育大学大学院教授)

『新編八戸市史』近世資料編は、藩政編、産業・経済編、文化・社会編の三巻構成となっている。二〇〇七年に刊行された近世資料編Ⅰは、天正十八年(一五九〇)から明治四年(一八七二)までの、八戸藩の領内支配や財政、幕藩関係に関する史料を収録した「藩政編」であった。本書はそれに続く「産業・経済編」であり、八戸藩領における交易や産業の実態を示した史料が収録されている。

本書の構成は以下のとおりである。

第一章 交易

一、御産物方の業務上のメモ

トピックス① 南から来たサツマイモ

第二章 商業

第一節 遠隔地商業

第二節 商いと諸稼ぎ

第三節 市日商業の形成と展開

第四節 商業経営

トピックス② 八戸湊と飯盛女「とわ」心中一件から

第三章 情報と交通

第一節 情報の伝達と手段